Woodworks Field Notes

ダグラス・ブルックス　#4

和船をつくる

木の造船を研究するアメリカ人の船大工、
ダグラス・ブルックスさんと、彼のもとに
集った７人の青年たち。
失われゆく伝統技術と社会的不安を抱えた青年、
２つの行く末を見守る、ある美術館のプロジェクト。

写真：松本昇大、Kim Sajik (P35)　文：石田エリ

和船という消えかけた文化に小さな火をともす

20年に一度、社殿を建て替える伊勢神宮の式年遷宮は、宮大工の技術を絶やすことなく受け継ぐためのものでもある。〝木〟を読み生かす、智慧の結晶のような大工仕事はそれほどに、守られ受け継がれるべきものである一方で、同じく木を扱う船大工の仕事は、大工の勘と口承だけで一切の記録を残さないため、後継者がいないまま絶滅に近い状態にあるという。

京都・亀岡のアール・ブリュットを紹介する「みずのき美術館」を〝工房〟とし、この地にかつて存在した「木の鮎舟」を蘇らせたのは、今年5月のこと。このプロジェクトで造船を教えたのは、日本でわずかに残る船大工の技術を記録として残す活動をする、船大工で木造船研究家のダグラス・ブルックスさん。そして、彼のもと制作に参加したのは、引きこもりなど、社会的に不安を抱える7人の青年たち。

造船所と化した美術館で、毎日少しずつ舟がつくられていくのを、やがて地域の人たちみんなが見守り、完成を楽しみにしていた。そうして完成後の6月29日、青年たちの希望によって保津川で進水式が行われた。

ダグラス・ブルックス

1960年、アメリカ・コネチカット州生まれ。船大工、木造船専門の研究家でジャーナリスト。サンフランシスコの国立海洋博物館専属の船大工を務めた後、日本と全米各地の博物館のために木造船を制作している。

May 1 - October 13, 2014
Boatbuilding Project at MIZUNOKI MUSEUM

京都・亀岡。みずのき美術館を工房に和船をつくるプロジェクト

不確かな言葉よりも、身体感覚を頼りに

はじまりは、「みずのき美術館」のディレクターを務める奥山理子さんが、ダグラス・ブルックスさんの和船の研究発表会に足を運んだときのことだった。京都府亀岡市、障がい者支援施設「みずのき」を運営する松花苑を母体として、2012年に開館した「みずのき美術館」。奥山さんはここの企画・運営を任され、この美術館のあり方を模索し始めたところだった。

「私はもともと、母が施設長を務める『みずのき』で、ボランティアスタッフとして働いていたんです。施設の畑で農園活動をしたり、アートプロジェクトを手伝っていて。その農園では、引きこもりやニートの方たちを支援するNPO法人『京都ARU』からも数名、農作業を手伝いにきてもらっていました。ARUのメンバーにとって、農作業ももちろん有意義なことですが、もう少しショートスパンで達成感が得られるようなことを、みずのき美術館でできたらと考えていたんです。そんなときに、ダグラスさんの講演を聞いて、なぜかARUのメンバーの顔がどんどん浮かんできて。『舟をつくろう!』と閃いて、すぐダグラスさんに話を持ちかけました」

ダグラスさんは、ためらうことなく快諾した。自らが研究している和船文化を伝えられるいい機会でもあり、それが青年たちにいい作用を及ぼすことができるかどうか、ということにも関心を抱いたからだ。

「このプロジェクトはダグラスさんの人柄に終始支えられました。紳士的でいてユーモアもあって、青年たちに対してごく自然体で接してくれて。引きこもりは、長引くほど人との距離感を失ってしまう。目の前の人とどれくらいの音量で話せばいいのかさえ葛藤なので、外に出るのはエネルギーをたくさん消耗することと。教える立場であるダグラスさんが、言葉の通じない外国人であるというのも彼らにとって〝参加してみよう〟と思える理由になったと思います」

個人差はあれど、毎日社会生活ができているものにとって、引きこもりの人たちがどんなことをハードルに思っているのかをリアルに想像することは難しい。奥山さんが彼らに共感できるのは、彼女自身も心に葛藤を抱えていた時期があったからだ。

「子どもの頃から『みずのき』で働く母のもとで育ったことで、10代の頃には、知的障がいのある人たちに囲まれた環境が、私にとって一番安らぐ場所になっていました。逆に学校という社会に居心地の悪さを感じるようになっていったんです。心身共に深い悩みから抜け出せなくなっていた時に、施設の畑仕事を一緒にすることになったパートナーが、ドイツ人の女性でした。わずかな英語とジェスチャーで、ともに作業をする。通じないことが前提だと、お互いに伝えようとする気持ちが伝わるし、コミュニケーションがうんとシンプルになる。日本人同士だと、言葉がわかりすぎて余計な詮索をしたり不安になったり……日本人同士なら通じることが前提のはずなのに、通じないというジレンマがあった。だから、自分の手に伝わる振動や音といった、頭ではなく身体感覚に訴えるような時間が、きっと彼らを解放してくれると思ったんです」

造船には、〝擦り合わせ〟という舟を浸水させないための技術がある。地道な擦り合わせの作業は、彼らにとって単に舟をつくるだけではない、いろんな意味を含んでいた。舟が完成したあと、「みずのき」で支援職員として働き始めた人、より活動的になれた人など、それぞれの一歩を踏み出すことができたそうだ。

「私自身も、この美術館を多様な生き方を伝えていける場所にしたい、という明確な思いを持つことができました。作品がすべてではない。美しい一艘の舟を媒介に生まれた関係性こそが、今後も大切にしたいと思っていることです」

奥山理子 おくやま・りこ

1986年生まれ。2010年より、みずのき美術館の立ち上げに携わり、12年の開館より企画・運営を担当。現在、日比野克彦監修の日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展「TURN／陸から海へ」を開催中（2015年1月12日まで）。

みずのき美術館
京都府亀岡市北町18
☎ 0771-20-1889
www.mizunoki-museum.org

亀岡を代表する観光のひとつ「保津川くだり」も、今は木造船は使用していない。近年では、亀岡は有機農業の盛んな地域としても知られるようになってきている。